

松沢研究奨励賞A部門受賞者 研究報告

独自教科「鶴見ふるさと科」を通した主体的に学ぶ子どもの育成

～子ども一人一人が自分らしく、主体的・協働的に学べる学級・授業づくりを目指して～

教育人間科学部学校教育課程 H16年3月卒

横浜市立市場小学校 教諭 磯野 哲英



1 研究テーマについて

本校は県内有数の大規模校である。学年の人数は200人を超え、1～4年生と5・6年生で校舎の敷地が離れている。人数が多いことによる利点も多いが、授業を進める上では見学や体験的な学習が実施しづらい等の弊害も多くある。また、人数が多いが故に、大勢の中で控え目になりがちな傾向もある。

そういった課題を踏まえて、本校では研究主題を『主体的に学ぶ子どもの育成～「〇〇したい!」「なぜ?」が生まれる授業づくりを目指して～』として、どの教科でも一人一人が主体的に学習に取り組むことができる授業づくりの在り方について、教科を絞らずに授業研究を進めている。

また2022年度から、併設型小中一貫校の取組として、独自教科「鶴見ふるさと科」の授業づくりを進めてきた。これは、総合的な学習の時間と他教科の学習を関連付けて、自分たちのまちの材を取り上げて、まちの一員としての誇りをもったり、自覚のある行動をしたりする子の育成を目指している。3年生では、社会科の学習と関連付けて、交通事故や火災などからまちを守る人々のはたらきについて学び、地域の一員として自分ができる行動を選択・判断する力を高めていくことを狙いとしている。

本実践では、3年生の社会科の学習をきっかけにまちの安全について自分ごととして考え、地域のひととかわりながら学習することで、自分自身がまちの一員であることを自覚するとともに、「自分自身にもできること」を主体的に考えることを目指した。

その中で、子どもたち一人一人が社会的事象と出合った際の問題意識を大切にし、自分なりの問いを追究していくことを大切にしたい。具体的には、普段は気にしていなかった自分のまちの設備やまちを守るために働いている人たちの行動の意味や価値に迫っていくことができるように、個々の調査活動を大切にしたい。また、一人一人の学びが他者の学びとつながり、関連付いていくことで、理解や思考が深まっていくように、協働的な学びも大切にして実践を進めた。

2 研究の視点と手立て

実践にあたって、次の4つのことを大切にしたい。

①学年共通で取り組める単元構想

前述の通り、学級数が多いため、それぞれのクラスが独自に人と呼んだり体験的な学習を行ったりすることが難しい現状がある。消防署や警察署等の見学ができない代わりに出前授業を開催したり、普段登下校時に見守り活動をしている方々とかかわれるようにしたりした。また、学年内で教材にかかわる情報を共有し合いながら、どのクラスも共有の教材を活用しつつ、クラスの実態に応じて単元構想をつくっていけるようにした。

②子どもの日常的な学習・活動をみとる

子どもの日常的な体験を学びに生かせるように、登下校中に発見した見守り活動や交通安全にかかわる設備を探す声掛けをした。また、発見した情報を共有するために地図を掲示して、そこに自由に書き込みをできるようにした。さらに、担任の業務としての登下校の見守りをしながら、それぞれの通学路の特徴に目を向けられるように、個々に声掛けをした。

③問題発見力を高めるための問いかけと資料提示

単元の学習計画を立てる際に、子どもの普段の生活の中で何となくかかわっていたものに問いを見いだせるように、地図や写真を活用しながら「あれ?」「どうすること?」などのつぶやきを引き出せるようにした。

④学び合える集団になるための日々の取組

年度当初は自分の考えを表現したり話したりすることが苦手な児童が多かったため、教師がみとりを生かして指名をしたり、少人数のグループで話し合ったりする機会を多くつくった。また、話し合いの中で反応したり、他者の意見に関連付けて話したりできるように、聴き合うことを大切にしたい。



全員が共通の土台に立って話し合えるように、現地調査を数回行った。

3 実践概要 全25時間 (社会科15 国語5 総合5)

①導入

地域の火災件数や交通事故件数などを知ること
で、「まちの安全」に関心をもつとともに、問い
を見いだせるようにした。その問いを出し合う中
で、「守っている人や設備」に子どもの関心が向
いていったことを生かして学習計画を立てた。

また、中学3年生まで続く、「ふるさと科」の
学習であることも子どもに説明した。

①火事からまちを守る人たち (社会)

鶴見消防署の方々による出前授業や鶴見消防団
(動画で視聴) との出会い、学校や自宅周辺の消
防設備の調査を通して、火災が発生した時に様々
な人や設備が連携して活動に取り組んでいると共
に、火災防止にも努めていることの価値に気付く
ことができた。出前教室での学びを根拠に、高層
階で火災が起こった際にも対応できるように準備
している等、人や具体的な設備との出会いが学び
に生かされた。

②交通事故からまちを守る人たち(社会)

交通事故件数に問題意識をもちつつ、件数が年
々減ってきていることから、「火災と同様に様々
な人や設備が連携して安全を守っているのでは」
という見通しをもって学習が始まった。鶴見警察
署の方々(出前教室)や、交番や見守り活動する
方々から登下校時に聴いたことをもとに、事故を
未然に防ぐための連携した取組について学習した。
その中で、身近なところにある交通設備の価値に
気付くとともに、「通学路には信号が少なく、
危険なのでは?」と、自分ごととして問いを見い
だすことができていた。

③まちの安全について考える(ふるさと科)

「信号のない交差点は、本当に安全なのか」と
いう学習問題について、再度調査活動を行った上
で話し合いをした。その中で、「スクールゾーン
協議会」の存在を知り、警察だけでなく、様々
な立場の人たちが連携してまちの安全について話
し合い、対策をとっていることに安心感や期待感
を抱いていた。同時に、自分たちがまちの安全の
ためにできることがあるのでは、という思いもふ
くらんできた。

「自分たちや、1・2年生が交通のルールを知
って、安全に登下校することが大切」という思い
から、国語の学習と関連付けて、1年生向けに安
全に登下校することの大切さや見守り活動をし

ている人たちの価値等を伝える報告文作りに取り
組んだ。

4 研究の成果と課題

①学年共通で取り組める単元構想

同じ教材でも、学習の進め方や終末の活動を学
級の実態に応じて進められるように、学年研等で
情報交換を密に行った。また、授業を見合うこと
で、それぞれのよさを参考にし合うことができた。

一方で、警察署・消防署等、大きな機関以外と
直接出会う機会をつくるのが難しかった。

②子どもの日常的な学習・活動をみとる

下校時の見守りをしながら、それぞれの方面の
通学路の設備や見守り活動について、子どもと一
緒に見る機会を多くつくったことが、授業内での
多くの子どもの発言を引き出すことや、資料提示
をすることに大きく役立った。

家族に見守り活動をしている児童もいたが、そ
の活動を担任が把握した時期が遅く、学習でうま
く生かすことはできなかった。

③問題発見力を高めるための問いかけと資料提示

教室に常時地図や写真を掲示することで、子ど
もが調べたことを随時共有し、学習問題ができる
よいきっかけにすることができた。

スクールゾーン協議会の話の中で、PTA 会長に
取材をした話を子どもたちに提示した。今回は日
程調整が難しかったが、できる限り、参加した方
の生の声を聴ける機会をつくれるとよりよかった。

④学び合える集団になるための日々の取組

特に交差点の安全について話し合う場面では、
一つの事実に対して様々な立場からの考えを出し
合うことができた。自分の気付きや考えと比較し
ながら話を聴く力が養われてきた。

5 終わりに

学習を通して、自分たちのまちについて改めて
興味をもち、まちのためには働く人たちへの感謝
の気持ちを抱くきっかけとなる学習が展開できた。

一方で、中学3年生までの学びの系統性をどう
構成していくか、より具体的な事実との出会いを
どう作っていくか等、独自教科として今後改善し
ていくべき課題も多くある。今回の実践を、学校
全体の財産にしていけるように、今後も励んでい
きたい。